

# 第29回 「私の中で今、生きているあなた」 パネル展

12月8日から11日まで

大分県総合文化センターギャラリー

朝日新聞大分12月10日

新聞

第3種郵便物認可

朝日新聞 14.0

## あなたを 忘れない

パネル展を紹介する伊福理事長 大分市高砂町



NPO 大分で自死遺族パネル展

### 「自殺は社会の問題」

「現状に耐えられなくなった」「怒られるのも言い訳するのにも疲れました」。働き盛りで過労やうつとなり、自ら命を絶った人たちの生前の写真や遺書、遺族の言葉などを集めたパネル展「私の中で今、生きているあなた」が9日、大分市のichiko総合文化センターで始まった。営業マンやフリーター、看護師、医師、教師や市職員、運転手ら全国各地の50人の無念さや家族の悲しみが静かに紹介されている。

会場には、自ら死を選んだ人たちの子供時代や仕事の様子、にっこり笑った記念写真などが並ぶ。46歳だった設計技師の男性は、家族あての遺書に「恨むなら俺と会社を恨めよ。勝手なお父さんで申し訳ない」。19歳で亡くなった男性は「世間が気になっ

て歩いていてもとても怖い」と書き残していた。「なぜもっと優しくできなかったか」「仕事より命が大切だともっと言えばよかった」という遺族の言葉が、深い悲しみと悔しさを伝える。主催者は大阪市のNPO法人「働く者のメンタルヘルズ相談室」（伊福達彦理事長）。遺族の了解を得ながら写真や文章を集め、2007年からこれまでに全国28カ所で開催を続けてきた。きっかけは、理事長の伊福さんが労働組合の活動を通じて面識があった50代の男性会社員が、上司のパワハラを受けたという手記を残して自殺したこと。これを機にNPO活動の軸足を相談業務から現状を伝える展示活動に移したという。写真や文章のパネルは約150枚で、大半は実名入り。巡回展には写真などを提供した遺族も度々訪れる。伊福さんは「ひっそりと死んでいった家族が、ここでは社会に訴える役割を果たしていると感じ、ほっとした」という遺族も多い」と言う。

(原篤司)

# 「働き盛りの自死」考えよう

# 無念、遺族の悲しみ

# 伝えるパネル展

きょう開幕



自死遺族パネル展の会場に展示される娘の写真を見守る寺尾さん(左)と主催者の伊福さん

大分

働き盛りにうつ病などで自殺した人たちの生前の写真を集めた全国巡回展「自死遺族パネル展」私の中で今、生きているあなた」が9日から、大分市高砂町の県立総合文化センターで開かれる。

11日まで。50人の写真や日記からは、自ら命を絶った人たちの無念さや、遺族の悲しみが静かに伝わってくる。

「会いたい、会いたい」

。会場の壁には遺族の声飾られている。展示された写真約100枚は、はつらつとした表情や笑顔、子ども時代の姿、家族写真などさまざま。故人の在りし日を浮

## 50人の写真や日記展示

## 企画の伊福さん「社会の問題」

かひ上からせる。企画したのは大阪市のNPO法人「働く者のメンタルヘルス相談室」の伊福達彦理事長(67)。2006年、伊福さんが所

07年の京都市を皮切りに、これまでに巡回展を28回開催。家族や友人を自殺で失った人も多く訪れ「同じ気持ちの人がいてホッとした」「故人の苦しみが少し理解できた」などの反響が寄せられるという。

写真を提供した遺族も巡回展に足を運ぶ。今回、山口県岩国市から大分市を訪れた寺尾真澄さん(51)は、08年に看護師の娘を亡くした。「写真展を見ると、この子にもみんなに伝える役割がある、生きているんだと思える」と語る。

会場にはうつ病やパワハラメントなど、日本の職場環境の悪化を解説するパネルも展示。伊福さんは「うつ病は心が弱いと個人の問題にされるが、働き方や職場など社会の問題。写真展を通じて、考えてもらえれば」と語っている。

入場者151名

# 自死遺族パネル展 生前の写真や遺書

大分市で あすまで



自殺の現実を見てもらいたいと、生前の写真などが並ぶ

大分県民ギャラリー

第29回自死遺族パネル展「私の中で今、生きているあなた」が9日、大分市のいちご総合文化センター県民ギャラリーで始まった。11日まで。うつ病の相談などを受けているNPO法人「働く者のメンタルヘルズ相談室」（大阪市）の主催。自殺の現実について知ってもらおうと2007年から全国各地で開いており、県内では初めて。

まじめで責任感が強かったという音楽教師だった女性(33)がほほ笑む写真「上司に『会社に迷惑を掛けるならこの際自分から辞めたらどうや』と言われた。会社に35年尽くしたのに何も言い返せず悔しい」（50代男性）とつづったメモなど働いていてうつ病になり自死した50人について、遺族が提供した写真や遺書などを展示。「サインを出して

いたはずの夫を助けられなかった」（40代女性）など大切な人を失い苦しむ遺族らの思いや、労働時間や睡眠時間などうつ病の背景とされるデータも紹介。

同相談室の伊福達彦理事長は「20代、30代の若者の死因トップが自殺。うつ病になるのは弱いからではない。写真と実名で事実を訴えることで、亡くなった人の名誉を回復したい」と話している。

## 大分刑務所内の 洋裁工場で火災

アイロンのコード焼く

8日午前11時40分ごろ、大分市畑中の大分刑務所の洋裁工場内から出火。電気蒸気アイロンの電源コード約1・5メートルを焼いた。けが人はなかった。同刑務所によると、出火当時は刑務作